２０２４年１月１４日　青戸教会　「出会い」

聖書　サムエル記上３章１～１０節、ヨハネ福音書１章３５～５１節、高橋克樹牧師

３５節を見ると、洗礼者ヨハネに２人の弟子がいたことがわかります。この個所を直訳すると、「弟子たちの中の２人と一緒に」となっていて、ヨハネには何人も弟子たちがいたことがわかります。３６節を見ると、ヨハネは歩いておられるイエスを見つめておられたとあります。「見つめていた」とあって、これは１章４２節でイエスがシモン・ペトロを「見つめて」と同じ語が用いられていて、その語の意味は人や物事の本質を見抜く仕方で見ることを意味する語が用いられています。

そしてヨハネは前日の証言（２９節）を弟子たちに対して繰り返します。『見よ、神の小羊だ』と。イエスのことを世の罪を贖う神の小羊と言うということは、神から遣わされた真理の啓示者はこの方であるという認識に立って、ヨハネは自分の弟子たちに、その事実を見るようにと促したのです。弟子たちと一緒に立って、真理の啓示者に向かて、あの人こそが神の小羊だというのです。

ここには「師」としての姿勢があります。「師」というのは、自ら求めるものを弟子たちに明らかにし、弟子たちと共に求道の歩みをする者です。「師」というのは決して完成者でも自己完結的な存在でもありません。真理を営々と求める一求道者にすぎません。ヨハネはそれのみではなく、弟子たちが自分を越えて真理に肉迫していくことを望むのです。自分の弟子たちを自分に従属せしめず、心理に従属せしめることに徹しているのです。このヨハネに姿勢こそが師としてあるべき姿であると思います。

『見よ、神の小羊だ』（３５節）このヨハネの証言をヨハネの弟子たちは、今こそヨハネから去ってイエスのもとに赴け、という師の言葉として受け止めました。３７節を見ると、二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った、とあります。自分の弟子に対して、真理に向き合っていくことを諭す師のすばらしさと共に、その促しに応えて、真理を求めて生きようとする弟子たちの真摯さに驚かされます。

師に媚びたり、弟子に媚びたりしない姿勢があってこそ、真剣な求道の道が生まれるのです。ヨハネはこのように、イエスに自らを明け渡し、また自分の弟子たちも明け渡すことにおいて教師としてのあるべき指導を果たしたのです。「従う」という言葉が繰り返されていることにも注目したいと思います（３７節、３８節、４０節、４３節）。この世に啓示される真理を認識することはイエスに服従することによってのみ、達成できる事柄なのです。ボンフッファーが「信じることは従う琴である。従うことは信じることである」という言葉を残しています。服従ということが私たちの信仰生活の中に根付いていないで、いくら信条を唱えても信仰生活には程遠いことになります。

けれども、イエスに服従していく信仰の歩みも、イエスの「振り向き」イエスの顧みがあるから持続できることなのです。３８節を見ると、『イエスは振り返り、彼らが従ってくるのを見』ていたのです。イエスに従ってきたヨハネの弟子たちを、イエスは『振り返り』、彼らがついてくるのを見ていたのです。この振り返りが彼らの服従を促していったのです。

ヨハネから聞いてイエスに従った２人のうちの一人の弟子の名前がアンデレであった（４０節）のですが、アンデレはガリラヤのベトサイダの出身（１章４４節）で、シモン・ペトロの兄弟でした。アンデレは福音書の中では、全く目立たない存在で、彼がどれだけの活躍をしたのかわかりません。

けれども、大切なことはアンデレが自分の出会ったキリストのもとに最も身近な兄弟シモン・ペトロを連れてきたという事実です。その後のイエスの弟子たちの中で、アンデレはほとんど名前も出てこない存在ですが、イエスの弟子としてのアンデレに何も目立ったところはありませんが、アンデレにとっては、それで十分なのです。自分が出会ったキリストを語ること以外に、伝道者としての栄光はないからです。

アンデレと同じように、ヨハネからイエスに弟子入りしたもう人の名前もヨハネ福音書には記されていません。旧約聖書でも、新約聖書でも大切な信仰の伝承を担ってきたのは、無名の預言者や信仰者たちでした。この無名の弟子が、一人の受洗者を出さなかったとしても、一つの教会堂を立てることがなかったとしても、その働きが無価値だということはないのです。イエスに出会って、したがって生きた人生をマッツすることができたならば、それで十分なのです。

アンデレは兄弟シモンに『「わたしたちはメシアに出会った』（４１節）と告白しています。『「出会う」という語は元来「見つけ出す」という意味の語です。それは求めていたものを見出すということです。洗礼者ヨハネを離れて、「イエスに従っていった」時から、アンデレはキリスト（メシア）を求めていました。この求めなくして、キリストとの出会いはなかったことでしょう。アンデレのこの出会いは、師であるヨハネの促しによるものとはいえ、それまでの師から離れるというのは決断の要ることです。単なる好ましい人間関係に満足している限りは、このような決断はできません。それを促すのは、真理への渇望であり、飽くなき真理への求道心です。このような真理との出会いが素晴らしいのは、そこには真理に方向づけられた自分が新たに生まれるからです。もしも、出会いが自分の現状を肯定するものでしかなかったならば、私たちは新しく生まれ変わることもなく、現実に埋もれた人生を歩むことになってしまうでしょう。

イエスに従っていく、ということは、言うまでもなく、物理的にイエスの後を追うことではなく、イエスの生の方向性を自らもたどるということです。イエスの生の方向性というのは、隣人に向かって、隣人と共に歩むということでした。アンデレがまず向かった隣人は自分の兄弟シモンでした。肉親や身内の者たちへの愛が強ければこそ、伝道は家族から始められなければなりません。家族とは自分の延長ではなく、神か与えられている最も近しい隣人です。家族伝道は難しいとよく言われることです。自分の日常生活のありのままを知られているから、何かといえば、それでもクリスチャンか」と言われるとよく言われる頃です。けれども、そのような、どうしようもない人間を神は救うということも事実です。アンデレと同じように、イエスのもとに連れて行くことが必要なのでしょう。イエスのもとに共に連れ立っていくこと以外に方法はないのです。自らの弱さを認めつつ、求道の歩み共にすること以外に道はないのです。伝道は主イエスによって成就するからです。４２節を見ると、イエスがシモンを見つめて、あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファと呼ぶことにすると言われることによって、アンデレの伝道は主イエスによって成就したのです。それはまた、アンデレの、キリストとの出会いの喜びをより一層大きなものにしたことに間違いはないのです。

私たちも、自らの弱さゆえに。伝道に憶病になることなく、主イエスが真似家くださる愛に委ねつつ、イエスとの出会いを持ち運ぶ者として歩んでいきましょう。